

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一冊一日發行）
昭和二十八年四月一日發行
昭和二十八年三月廿五日印刷
昭和二十八年四月一日發行

第十九卷
四月號

淨土



蓮文

四月號

愛 憎

イギリス版「自由學校」は日本版とはちがつてゐる子供の學校であるが、徹底的の自由教育を標榜している。

校長のニイル先生、子供達と起居を共にして、得難い教訓を自らに得ている。その一つに、「憎しみは愛の反對ではなく、愛の變形である。愛の反對は無關心である」と悟つた。

憎しみの根源は自らのものを奪われることにある。愛を奪われ名譽を奪われ、財産を奪われる。奪われる條件は「自分」にある。「自分」がなければ奪われるべきものはない。愛もまた「自分」を條件としている。自分が愛される。自分が得る。自分が偉くなる。すべては自分にかかわつて来る。従つてそれは欲につらなる。佛教ではいみじくも愛欲といつてゐる。自分を抜きにすれば愛すべき主體も、憎むべき客體も消失して、すべては一如の靈智の世界になる。愛の反對が憎しみではなく、無關心であるのはこの故である。佛教では端的に「無我」といつてゐる。

ニイル氏は教育の實踐に於いて、人間の中でも最も人間らしい子供の生活の中からこれを掘み出し、佛教は徹底した哲理と宗教的體驗を通じてこのことを實證している。平凡な事ながら、道は異れども、眞悟の嶺は一つしかないことをしみじみと感ずる。

(竹中)

淨 土 四 月 號 目 次

合 掌……………吉田絃二郎(1)

増上寺の昨今……………大野法道(4)

忍濃上人のこと……………大橋俊雄(18)

四つの生活……………中野剋子(28)

人間釋迦

(對談)

佐々木孝丸(10)
佐藤密雄

名士訪問 木村篤太郎長官……………(22)

花まつり……………大阪・京都・北海道(9)

新興宗教……………齋藤昭俊(30)

宗門の大學を語る

椎尾井匡(13)
岡田宜法

祖母の追憶……………樫村治子(16)

阿彌陀經の話……………藤井實應(24)

學校訪問 大正大學高等學校……………(13)



合 掌

吉 田 絃 二 郎

スコットランドの詩人ロバート・バアンズに「ハイランドのメリー」という有名な美しい詩がある。

この詩はバアンズが三年前に亡くなつたメリーのことを思い出して一夜で作つたといはれてゐるもので、バアンズの數ある詩の中でも最もやさしい、抒情味ゆたかな詩である。

恰度山査子の花の咲くころであつた。バアンズはモンゴメリーの古城のほとりで春の日さしを浴びながらメリーと語り合つた。

メリーは高原から働きに来てゐた娘であつたが、今度故郷にかへることになつたので、バアンズは古城の山査子の花の蔭で別れを惜しんだ。「秋になつたらふたゝび

高原から立ちもどつて来る」と誓つてメリーは故郷にかへつたのであつた。

しかし秋風が吹き初めてもメリーはバアンズの許へは歸つて來なかつた。

かの女が死んでから三年経つた。日本流にいへば三年目の連夜のことであつた。平常はともすれば忘れがちであつたメリーのことが、その夜はバアンズのこゝろに喰ひ入るやうに思い出されて、かれは夜つびて寝もやらず部屋の中を歩いてゐたといふことである。

その夜うたはれたのが「ハイランドのメリー」である。

自分の親しい者を失つたことのある人にはバアンズのその夜の心の苦しみは想像ができると思ふ。

わたくしたちは普段は親しい者を失つた悲しみを感じながらも、諦めといふところに馴らされて、ともかく落ちついた生活をしてゐる。たとへば静かな山の湖のやうなものである。無量悲歎の水をたゞへてゐるが、静かである。

ところで一度湖の土堤が破れるとすさまじい音を立てて崩れ落ちるやうに、わたくしたちの悲しみのころも時として、たまたま、悲しみの土堤を壊つてしまふと悶々の情に耐へられなくなることがある。

その場合亡くなつた人を慕ふ心の切々たるものがあることはいふまでもないが、それにも増してころを傷めるものは、亡くなつた親に對し妻に對して心づかひの到らなかつたことである。

このやうな自分自身を責めるころは生きてゐるかぎりつゞくであらう。

このころは苦しい。バアンズが夜つびて部屋の中を歩きまはつた悶々のすがたも思ひやられる。

しかしその悶々の夜がわたくしたちに立ちかへつて來

ることもありがたいと思ふ。その悶々の夜こそ、わたくしたちは衷心から無限の世界を思ひ、はるかなる佛の國について想ふからである。その夜こそ凡夫の罪業をさながらに感じ、その夜こそまことの懺悔心に徹する。

庭の椿の下につくばひに一杓の新らしい水を入れてやつた。わたくしは縁側に椅子を持ち出し、硝子窓をへだて、つくばひを眺めてゐる。

鶯、かしらだか、目白、鶉……さまさまの小鳥がつくばひの新らしい水にあつまつて來て、水を飲み、水を浴び遊ぶ。

わたくしは縁側に釜の湯のたぎる音を聴きながらそつと小鳥たちの嬉々たるすがたに見とれる。

小鳥たちのつくばひの水に入り、水をはねて騒いでゐるすがたを見てゐる間に、わたくしのころはすつかり淨められてゐた。

わたくしは縁側の釜のたぎる音に松籟の聲を感じるほどの静かなころを見出してゐた。

わたくしは亡くなつた父母や妻のことを思ひ出した。

わたくしはこゝろの裡に合掌した。

わたくしは涅槃會に若くして死んだ友人のことを思ひ出した。亡くなつた誰れ彼れのことを思ひ出した。

一人の身寄りもなく深川の寺に葬むられてゐる無名の

俳人鷗洲のことを思ひ出した。

そしてかれ等のために、こゝろの裡に合掌した。

わたくしがそれと氣付いた時は小鳥たちはみんな飛び

去つてしまつて、椿の下には小鳥たちのはね、水に濡れた

つくばひだけが取り残されてゐた。

猫柳のびろうどのやうな柔かな芽が出て來た！

合掌しよう！

ひきがへるが澤から出て來た！

合掌しよう！

櫻の花が咲き、やがて散つてゆく！

合掌しよう！

悶々のあらしの夜も、静かなこゝろに雨のもとともに！

合掌しよう！

浄土俳壇

◎兼題、山吹、春風。

高木晴子先生御選

岩國 長岡 白朝居

茶の水はこゝろに汲みに來 濃山吹
春の風おのゝく吹く繋ぎ舟

〔選者批評〕
すつかり句作になれて居られます、ありのまゝの寫生と云ふ事がホト、ギスなどでは一番大事なことになつて居ります、頭の中だけで作らずみたまゝを寫生することが俳句を生々とさせることです。

北海道 竹岡 白蛙

山吹の影濃くありぬ石だゝみ
春風に日の照り交す水の面

俳句になれて居られぬ様に御見受けしますが忠實な寫生をなさることが作者を進歩させることですからこの調子で御勉強下さい

東京 高木 餅花

亭々と樹齡も忘れ春の風
自轉車に乗れる子乗れぬ子春の風

鎌倉 木下 春

色あせし八重山吹に今日も雨
瀬の音の次第に高き濃山吹

鎌倉 早見 君子

あの遊び何んのあそびぞ春の風
子らが遊ぶ庭に座り春の風

同 淡路 鴨江

かぞへみる白山吹の花まだら
日にひたり山吹の庭ひと廻り

同 佐藤 初瀬

廻り行く庭に書庫あり濃山吹
山吹や水戸家の墓所を尾守る

選者句

外出の心きまりぬ春の風
春風の海より吹いて來る住居

増上寺の昨今

大野法道



明治維新の變動の時、増上寺は、政府から北海道の開拓を命ぜられ、建物は海軍省などに徴用されたが、明治四年から五年にかけて、廢佛毀釋ということになり、本堂に大神宮をまつり、一山寺院の坊さんたちは、神職のしたゝれを着ることになったし、六年十二月には本堂を焼失してしまつた。然るに信教自由國民の信仰は神道に限らず從來の教は廢すべきでないという、建白書を政府に出し、それが八年に許可になり、民衆の教化指導に

説教會が設立されたが、當山の第七十世福田行誠上人は、その會長で、大内青巒居士、岸上候嶺が活躍されて、世人は漸く安定を取りもどした。

明治十年九月二日靜寛院宮様がお亡くなりになつたが、宮の御遺言で當山で佛式の葬儀が行われ、各宗の僧が列座した。こゝに佛教復活の大勢が成つたのである。それから十八年に、行誠上人は本堂建築を決意し盡力されたが、知恩院へ轉ぜられ、二十四年に落成し

た。上人は當時佛教界の偉僧として、また解説人として面目を表わし、がく／＼の言議を以て内外に警告し、不拔の信念を以て風教の行くべき道を指導された。

その後は、日野靈瑞上人、吉水玄信上人、秦茂應上人、野上運海上人、山下現有上人、堀尾貫務上人、道重信教上人、岩井智海上人、大島徹水上人、椎尾辨匡上人の各法主を経て、明治四十二年にまた本堂は炎上し、大正十三年に間口奥行各二十數間の大殿を建築したが、その建築局長は本多淨嚴師であつた。

昭和十四年に開山西譽聖聰上人の五百回忌を勤めたが、その記念に景光殿と聰和殿が建てられたのであつた。然るに大東亞戦争となつてから、軍の徴用する所となり、三門の扉は固く閉じられ、軍隊の據點となつたので、二十年五月二十五日大空襲の際、數十本の焼夷彈が落とされ、大殿、景光殿、聰和殿は全焼した。

國寶であつた開山堂、徳川二代、六代、七代の御靈屋も悉く戦火のため失われ、現に三門（之も大殿炎上の時、一部に火がついたが、無理に駆け上つて消しとめた）、御靈屋の謄門、勅額門、一字門、二天門は國寶として

存在している。

目下建築中の新本堂は、昭和二十三年八月に設計し、起工したのであるが、建坪は、間口十一間、奥行十三間で、向拜が二十二坪あり、總坪數百六十五坪、入母屋造、屋根は本葺、内陣は疊處、外陣はコンクリートである。二十六年十二月十二日上棟式を、八百谷順應師の考案によつて舉行したが、その際は現法主椎尾辨匡大僧正を大導師とし、結界導師五人（渡邊眞海師、望月信道師、大村桂巖師、伊藤芳瑞師）が登座し、近來稀に見る盛儀であつた。新築工事は着々進捗し、年内には大體完成の見込である。境内地は、明治時代には上地を命ぜられてから、國有となつてしたが、昨二十七年末無償譲與をうけて寺有となつた。

法要行事は、宗祖法然上人の御忌法要を、毎年四月十四、十五、十六の三日間つとめる外、靜寛院宮御法要は十月二日、年始には修正會三段式、また節分會追儼式、涅槃會、春秋彼岸會、釋尊降誕會、お盆施餓鬼會、戰歿者追悼會、平和祈願會をつとめる。また十一月には三週間にわたつて、傳宗傳戒道場を開くことになつてゐる。

教化事業では、毎年二月に得度式を、十一

月に五重相傳會と、授戒會を隔年ごとに開いているが、一般人の信仰培養のために、緣山會を持つて居り、日曜講演には現法主椎尾大僧正、その他の講話があり、新本堂完成の上は毎朝法話をする予定である。

社會施設として、明德學園で幼稚園を經營し、更に常設講習として雅樂、茶道、書道、舞踊、珠算、洋裁、畫を描く會を開いているが、今後は初等から高等に至る教育施設をもつ意圖がある。また東京養老院とも密接な關係がある。

寺寶としては、高麗版、宋版、元版の三大藏經があつて、九間半四面の經藏に納めてあり、法然上人繪傳二卷は、後二條院の宸翰、土佐吉光の繪。以上二項は國寶、また後醍醐院の宸翰、御懷紙等がある。その外、五百羅漢圖百幅は、狩野一信の筆で、山内の源興院了瑩の發願に成るもの、極彩色の密畫である。大梵鐘は、江戸三鐘の一つに數えられるもので、寛文年間の鑄造、直徑五尺八寸、厚さ一尺餘の大鈞鐘で、毎日朝夕その殷々たる響を、可なり遠くまでたゞよわせてゐる。

（増上寺執事長）

映画

ライムライト

「眞の喜劇役者は、また眞の悲劇役者である」とシェクスピアは言つたと言ふ。ライムライトは、實にこの言葉を身を以て演じたチャップリンの近年に於ける最大傑作である。

チャップリンと言へば、山高帽を被り、スツッキを振り、丸い目と仰山な口ひげを奇妙に動かしつゝ、ガニ股で歩く滑稽な役者を思い出し、誰しも抱腹して笑ふ事であらう。が然し、果して彼の喜劇の裏に秘められた人間の持つ悲劇性を、どれ程の人が知り得るであらうか。それは誰しもが持つ人間の郷愁の様な淋しさではあらうが、この郷愁を強く持ちながら、喜劇を演ずる所に、その悲劇性があるのである。

いや、人間は、何時も、例へば涙の出る程笑ひこけてゐるときでも、尙滿されぬ人間の淋しさに追ひ廻されてゐるのではないだらうか。そして、この淋しさ故に、時に絶對者にもすがつてみたい郷愁を味はふのではないだらうか。

ライムライトは、その意味で人間の眞相を示してくれる。若し、人間を本當にみつめる人ならば、涙無くしてこの映畫はみられない。(Y)



人間釋迦

—— 對 談 ——

劇作演出家

佐々木孝丸

大正大學教授

佐藤密雄

生温い春の一日、久里濱の小波の音を、佐

々木先生宅の明るい部屋の障子に受けつゝ、
兩先生の對談を記録しました。すぐ前庭に
は百年前ペルリが浦賀に上陸した記念碑が
あり、思へば感無量でした。

佐々木先生は劇作に、演出に、或は又數
多くの翻譯にと寧日無い傍、俳優として舞
臺やスクリーンにも活躍して居られる方で
す。又近時はラジオ東京の釋尊傳を演出さ
れて有名です。佐藤密雄先生は大正大學教
授にて、一面鎌倉大佛の住職としても大い
に活躍せられ、露坐の大佛と共に、一躍國
際佛都の名を發揚せられつゝあります。
しばらく、この兩先生の對談に耳を傾け

てみることにします。

完成された人間釋迦

佐藤 先生の評判は兼々伺つては居ましたが
どこの出身ですか。

佐々木 四國の眞宗、興正寺派の寺の子です
よ。祖父は勸學でしたが……

佐藤 そうですか。此の間のラジオでの釋尊
傳は仲々よかつたですが、どんな考へであ
れを演出されましたか。

私はね、大體釋尊については近頃この様な
事を考へているのですがね。

それは釋尊には奇蹟がないと言ふこと、
すなはち釋尊は確かに人間であつたと云ふ

ことです。

戦後西本願寺の女子大生二人がクリスチャ
ンになりましたね。その理由は、佛教には
奇蹟がないから宗教的なセンスを満足させ
ないからだと言ふのだ。そうですね。

私に云はせると、佛教に奇蹟のないのが
當り前で、釋尊の教は勉強し、考へぬいた
揚句の教法であつて、半神半人的開祖でな
い。従つて佛教は全く人間の宗教であると
思ふんですよ。

佐々木 斷然同感です。經文を拜見して釋迦
と云ふものを考へてみると、成道に到るま
での道程は、人間ばなれした人間にならう
としたのでなく、最高の完成された人間に

なるにはどうすればよいかと云ふ點にあつたと思ふのですがね。現在の非人間を、どうすれば完成された人間と出来るか、こゝに課題があつたのでせうね。

釋尊傳の演出もこんな事を考へつゝやつていましたかね。

佐藤 この事では色々の問題がありますね。

例へば教祖と云ふと世俗離れした所によさがある様に考へられますが、釋尊は最も世俗に浸つていた人であつたと思いますよ。

例へば出家と云ふ事も、當時に於ては流行の尖端で、青年の誰もがしたがつたものです。唯然し、これをする爲には、自分の仕事を譲り得るものが無いと駄目なのです。幸ひラゴラが出来た。釋尊にしてみれば、流行に走る絶好のチャンスであつたわけです。こゝで釋尊は流行の尖端の中で、最高の教養を受け、この中に人間の道を考へた。まあこんな風に考へられはしませんかね。

佐々木 そう云へば、あのラゴラと言ふのも何か出家の邪魔物の様に今までは傳記にありますますが、あれは逆と言ふ事になりますね。寧ろ出家のチャンスと與へた譯ですね。

所謂邪魔物と云ふ點からすると、人間釋

迦にしてみれば、全く夫婦愛の邪魔物と云ふ方が當つて居るのぢやないんですか。

佐藤 成程。現代的ですね、この解釋は。(笑)

しかし、こゝまで考へてよい一寸確信がありませんかね。釋尊は當時彼の國のホーブであつた。しかも彼の國は已に累卵の危き状態にあつた。こうしたときに、寧ろこの國を守るより、云ひかへれば有形の國を守るより、無形の國を建てんとした。すなはち、有限から無限に變へんとした人間的な欲求があつた。こんな風にですね。

佐々木 さあ。私にはその點分りませんね。

經典は醫學書なり

佐々木 しかし、私達素人觀からしても、釋迦は全く人間であり、完成された人間だと考へますね。

これについて、ニーチェでしたか、經典は衛生學の本であり、醫學書であると言つていましたね。人間らしい人間になるには、經典に書いてある通りにやればよいと言ふ譯なんでせう。私等も、最高の衛生學の書だと思ひますね。

佐藤 確にそれは云へますね。

佐々木 それでは、正しい人間の社會生

活を教へるもの、これ佛教と言ふ事になりますね。

佐藤 奇蹟々々と言ひますが、當時は、主觀的に考へていた事が、そのまゝ客觀的な事實と混同されていたとも云へますね。

佐々木 キリストの奇蹟等でも、何でしたか、キリストが瓶に水を入れてブドウ酒にしたとか云ふ奇蹟がありましたね。あれ等も、或る牧師の解釋によると、昔は素焼の瓶にブドウ酒を入れて置いたので、その酒氣が瓶に浸みていた。そこに水を入れたので、ブドウ酒の様な薫が出て來た。これがその奇蹟なのだと云ふんですが、どうもこの解釋の方が正しい様ですね。

私等も酒が好きですから、なくなるとこんな事でもして自分をごまかしますからね。(笑)

經典の解釋の上の變化から、如何にも奇蹟の様に取り扱はれる事もある様ですが、經典の内容そのものは、人間生活のあり方を教へたものと思ひますね。

佐藤 佛教の中道と云ふ教へも所詮それですよ。別に人間離れしたものではないのでしてね。おろかな苦行や、いやしい快樂から離れて、中道に立つた人間行動をやれと云

ふ事が、その教へですからね。

好い經典が欲しい

佐々木 私は常々考へているのですが、どうも本當に分り易い經典、本當にこれこそ佛教の理解に好適だと思ふ經典が欲しいと思ひますね。青年達にも分り易いものがね。

佐藤 所がね。この事は已に何百種も試みられてゐるんですよ。始めは仲々好評なのですが、何時の間にか、和譯は和譯として、ほんもののをやつて呉れと來るんですよ。宿命的なものが日本にある様ですね。(笑)

佐々木 それはなんですね。例へば儀式等は莊嚴なのが宜しいが、思想的には分り易いのがよいですね。何か大系的な、而もオーソドックスなものが欲しいものですね。

佐藤 その點は、もつと勉強しますよ。(笑)

佐々木 そればかりではないですね。第一この頃の坊さんが駄目ですよ。

まあ先生は別ですよ。(笑)

私等佛門出でこんな事云ふのは生意氣ですがね、もつと坊さんは、青年達と語り合はねば駄目ですね。第一語るだけの自信がないんでせうね。

佐藤 まあ、まあ。この點も、もつと勉強し

ます。(笑)

花まつりは國民的行事に

佐々木 花まつりも近い様ですが、あれ等も、クリスマスの様に、大々的に國民的行事にまで持つて行つてよいですね。農村等でも、一つの祭りとして、本當に生活と一枚の宗教の様にね。

佐藤 佛教は生活に入り込んでゐるが、余り入り込みすぎて忘れられてゐると言へませうね。

佐々木 そこですよ。忘れ去られてゐるものを生活の力として浮びあがらせなくては。例へば花まつり等そうですね。

お十夜とか、報恩講とか、あれ等も、農村等では楽しい年中行事として缺く事の出來ぬものとなつてますね。花まつり等も、特に都會等では、そうした形で發展させる事が必要ですね。そうして佛教と云ふものを再認識させる機會を造るのですね。吾々文士も、その職業の上で、役買ひますよ。

佐藤 その點では、大分そうした傾向にありますね。それでも、まだく研究が足りませんね。去年は鎌倉で大分盛んにやりましたが、今年は、もつと街頭に出る積りです

がね。

佐々木 必要ですね。それに子供だけの花まつりとしてよなしに、大人の花まつりとしてね。

佛教の演劇を盛んにしたい

佐藤 先生は最近何かお書きで。

佐々木 書きたいとは思つていますが、未だ纏りません。知切さんの「道元」等も評判がよい様ですが、どこの祖師でも、あゝした捉へ方で演出して行けば、成程そう云ふものかと見直すものですね。

佐藤 下手な説教よりも、大衆的で効果的ですからね。

佐々木 それに、これは大衆的にやらうとしても駄目ですね。ともかく何でもよいから、機會を捉へてどんくやれば、例へばラヂオ等も、一寸聞いたものが、非常に印象的に残つて居ると云ふ様なものでしてね。

佐藤 最近の何か感想を。

佐々木 いや、別にそんなもの。唯モンテンルバの戦犯を取材した「残された人々」に宣教師として主演した時、十二人もの死刑囚の死を見届けてガツカリし、一人佛壇に向つて四誓偈をやつたとき、本當に泣き乍(以下一五ページにつづく)

花まつり

實況

大阪

京都

北海道

花まつりは、春の訪れと共に来る最も楽しい祭の一つである。とくに子供にとつては、夢の様な喜びがある。さて各地では、この花まつりがどの様に行はれていゝであらうか。昨年の様子を二、三つかゞつて、更に國民の生活の糧としての花まつりに育てる様にして行きたい。

大阪

例年、大阪の花まつりは、大阪府佛教會主催にて、中央公會堂で催される。兒童を中心とした催物であることは、各地と大差はないが、青年に主力を置いている點に特色が見られる。

昭和二十五年度は、純青年を對象に、府立大手前會館で二日間催された。(但しこの際は大阪佛教青年協會主催、府佛教會後援)土曜の午後及び日曜の午前、午後と三部に分れ、各部共記念講演の他に音楽、舞踊、映畫の各一流を配した。市電に二日間吊ビラをして、全市に案内したが、些か高踏にすぎたのか、參會者は淋しかった。

二十六年は、四月七日正午より松坂會館

(松坂屋七階ホール)で、BYA大阪佛教青年協會の花まつり、八日當日は、府佛教會主催で中央公會堂に催され、何れも佛教聖歌のコーラスや青年を對象とした講演があつた。

去年は、佛教會ではやらなかつたが、BYAは淨土宗大阪市教區教化團の後援の下に、一昨年同様、松坂會館で、その他府下富田林市舉げての花まつり、住吉區佛教團等、府下各地盛大に催した。戦前の全寺院を舉げての盛大さには、到底及びもつかない乍ら、年に各地で催されつゝあることは、同慶に堪えない。

右のように屋内の花まつりは復活しつつあるが、全市民に花まつりを徹底させるには至つていないので、今年は動物園での兒童大會、八日當日は全市中に自動車走らせ、花

まつり氣分を横溢させる。同夜は、東京より一流名士を招き、講演と音楽の夕を持つ。音楽は在阪の佛教合唱團(マハヤナ・パドマ・ニルヴァーナ各混聲合唱團)を主體として、佛教人音楽家の參加を待つ。——以上は府佛教會の計畫で、その他、天王寺區佛教團・淨土宗大阪市教區教化團・住吉區佛教團等、昨年以上賑やかな花まつりになることは疑ひない。

右に於いて、佛教合唱團が大谷派系のマハヤナ・淨土宗系のパドマ・本派系のニルヴァーナと三合唱團を教え得るのは、他に一寸見られない特色ではあるが、經濟都市大阪らしい花まつりに至るには、こゝ四、五年を必要とする。商工會議所を動かして、花まつり賣出しを始め、記念品の數々を製造せしめ、眞

に經濟都市を擧げての花まつりを期待しながら、徐々にその機運を醸成しつつあるのが、大阪花まつりの現状である。

(大阪・秋田嘉朗)

京都だん王

準備 四月六日の日曜日に行う豫定で準備を始める。例年は子供の家(兒童福祉法に依る學童の放課後の學園・昭和廿四年十二月開設)と保育園児井に擔信徒の参加によつて行つて來たが本年は子供の家と保育園児に一枚づつ招待券を發行して各自それ〴〵好きな人を連れていらつしやいと言ふことでプログラムを編成する事にした。

かねての懸案で、今年は花まつりを屋外(境内)に持ち出したいと計畫したがいろ〴〵の都合で今年も屋内で第一部—式—。

第二部—子供まつり—として行ふ。

子供の家では、學習の餘暇を毎日須賀・佐々木兩先生の指導で人形芝居「花まつり」の製作と演出に一生懸命、保育園では保母さんの指導でお遊戯やお歌の練習をやつてゐる。今年始めての試みであるが「花まつり音頭」を作詩作曲し振付けて見た。これは從來の子供會や〇〇まつりと稱せられる

子供達の集會が稍々もすれば見物會に終るのでみんなが、身體を動かして花まつりを祝ひ踊つて見たらもつと楽しくなるだらうと考えたのである。只「花まつり音頭」の作詩、作曲が手製で甚だお粗末であるが、ともかく子供の家と保育園児に指導してやつてみる事にした。

花まつり案内狀

とき 昭和廿七年四月六日(日)午後一時半
ところ 三條大橋東入、だん王法林寺本堂、

井に子供の家ホール

參會 だん王子供の家、だん王保育園兒童

檀信徒・一般兒童、約二五〇名

プログラム

☆第一部 本堂

(色とり〴〵のお花で飾られたみ佛様が正面におまつりしてあります。靜かなオルガンの伴奏で式を始めます。)

花まつりの歌

献香献花、献茶

子供の家、保育園児代表

禮 拜

花まつりのお話 信ヶ原園長

佛の子供

禮 拜

——休憩—— (甘茶とおやつを頂く)

☆第二部 子供の家ホール

お遊戯 保育園児・子供の家

お歌 同 右

童話

人形芝居 子供の家

花まつり音頭 全員

ホールの真中の花み堂の佛様を中心に圓く輪を作りみんな櫻の花をかざしてピアノ伴奏で踊ります。

紙芝居 (平和の誓)

(信ヶ原良文)

北海道

雪國では色々な行事が雪の溶ける迄延期されるのである。

花まつりも四月八日と云う事になつてゐるが函館では雪がすっかり溶けて道路も乾き氣候も良くなつた頃を見計つて、五月上旬に行ふのである。

期日は七曜の關係とか、他の行事(丁度此の頃函館市では櫻まつりを行うのである)との關係によつて年々異なるが、大體八日前の五六日あたりをえらぶのである。

主催は函館市佛教協會及函館市佛教日曜學

校連盟で、それに市の工商會議所、商店街、市内有志による花まつり奉讃會等が協力し、佛教關係の女學校等も加勢して誠に盛大を極めるのである。

兩館の花まつりで面白いのは移動花まつりである。移動花まつりは灌佛法要の一日前に行れるのであつて、これは市中全般の人に全部釋尊の降誕を祝つて頂く意味でトラック二台、バス二台に誕生佛を白象上に安置し、僧侶、稚兒、聖歌隊等が分乗し、市中の要所々々で簡単な灌佛會を行つてあるのである。朝九時から夕五時迄かゝつてどんな場末でも（特に邊鄙な所をえらぶのである）行くので市民からは大變よろこばれ、特に集つた人達には菓子、キャラメル、旗、等をプレゼントするので大評判なのである。

移動花まつりを終えて翌日は灌佛法要であるが、此れは市中の盛場をえらび、舞臺を設け野外に大會場をつくるのである。

そして適當な場所に出發點を設け、丁度市内の目ぬきの通りを通れる様にコースをもうけ日曜學校生徒、佛教關係學校生徒、聖歌隊、藥師、稚兒、僧侶、等が延々二百メートルにも及ぶ行列を作り白像の上に釋迦佛を安置した車を引いて會場に至るのである。

此の間、有名デパートでは屋上より、散華をまきちらし、正に天女ならぬ店女の曼陀羅華に一層盛況を見るのである。

やがて會場に至ると中央舞臺上に誕生佛を安置し盛大な灌佛法要が執行されるのである。ラジオ、新聞の報道陣は此の年中の一大行事に此の時とばかり殺到し、地方にあつては、はな／＼しいジャーナリスト振りも發揮出来ない鬱憤を晴すのである。

やがて灌佛會が終るとこんどは時を経て夜に入り、佛教日曜學校主催の、子供藝能大會が開催される。

にぎやかに心から釋尊の降誕を祝う花まつりは此の様なお祭りさわぎの中に終るのであるが、其の間の莫大な經費は市内寺院が各々檀家に花まつり用の花（櫻の造花の下に花まつりと書いた札のついたもの）を賣つて得たものと、商店街、有志等からの寄附とによるのである。

戦後特に盛大に行れた花まつりは年々盛況を極めて行く様である。ゆく／＼は單なるお祭り氣分丈でなく、もつと精神的に有意義な方面に進めて行きたいと云うのが關係者の希望である。

（函館須藤隆仙）

東京の花まつり

—二十八年度—

東京の花まつりは今年ほどの催しも盛大を競昔羽護國寺の如き江戸風俗繪卷箱根保存の大名行列と古式による花祭供養大行進をやることや、日比谷公會堂に於ける花まつりの會主催の大會、或は小石川茗溪會館の文化人交驁花まつりの夕べ、その外高圓寺萩窪の花火大會とか、催しはいずれも盛澤山である。街頭花まつりは次の通り

銀座、新宿、澁谷、上野、浅草、池袋を始め廿三區、五市三郡の全地域都心及周邊の各繁華街では商店連合會、百貨店、花柳街三業組合、料飲組合、觀光連盟等の連携協賛により、花まつりセール、連合大賣出し花御堂提灯等の花まつりデコレーション、奉納花火の打揚げ、街頭には移動演藝隊の出演あり。都内浴場組合では甘茶風呂で都民の身心を清め、各所各寺院では甘茶接待を行ふ。尙期間中に養老院慰問、全生園療院慰問等が行われる。

宗教々育探訪

大正大學
高等學校

創立五年目と言ふこの高等學校は、流石に大正大學附屬と言ふだけあつて、各部屋は立派である。夜間だけの高等學校は、私立では殆んど不可能なのであるが、兎も角相當數の生徒を擁してやつてゐるとは大したものである。

「よくやつていますね」

如何にも馬鹿にした様な質問を發した次第であるが上田主事は得意げに、

「相當苦しい所もありますがね、着々と發展させています。いまに見ていて下さい。現在には量より質と考へています。然し量も必要ですね。近い將來には是非晝間も造ることを望んでいます。」

仲々苦しい返答であるが「大丈夫ですよ」と云ふ氣安さが、何處となく出て居る。

さて宗教々育については、と質問すると、

「それは本校の特色です。第一先生方は殆んど僧侶ですし、私立の立場を生かして、綱領にもある様に、宗教情操の陶冶と云ふ事に注意しています。」

本校では、灌佛會、成道會、涅槃會等には、休講して、全員講堂に參集、般若心經、四弘誓願等を讀誦して儀式を行ひ、終つて佛教講演會を催すと言ふ。

又校友會には宗教部と言ふのがあり、活潑な活躍を行ひ、佛教講演會や坐談會、寺院參拜等をやり、又特に別科として宗教科があり、生徒には自由に之を聴講させてゐると云ふ。こゝでは簡単な佛教概論、各宗綱要等が講義されてゐる。新年度からは必須として、一位宗教講座を設けるとか。ミツシヨンスクールと言はば、誠に典型的であると言ふ。

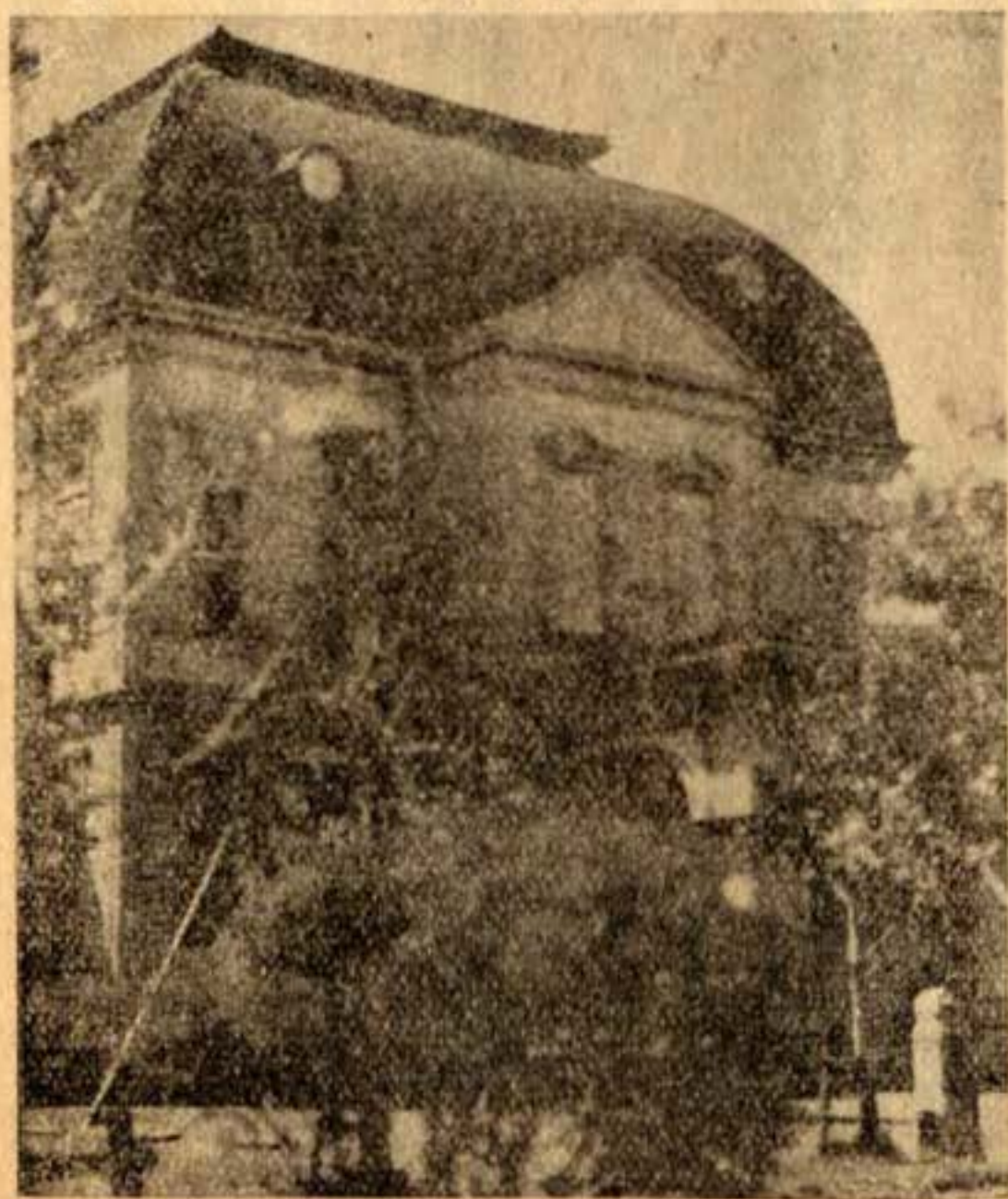
一寸教室をのぞいてみた記者は、生徒達の熱心なのに驚かされた。晝間の激勞にもめげず、あれ程までに

頑張る青年達こそ、將來の日本に大きな力となつてくれるのであらう。

田島隆純、星野俊英、鹽入亮忠の各校長先生を経て、椎尾辨匡博士を校長とする本校は、近時大いにその意氣のあがつてゐる大正大學と共に、着々と發展して行く事であらう。

聞けば、卒業生は未だ數少ないながら、母校に對する親しみは他に見られぬ程にて、仕事の多忙の間をさいて來校し、その發展の爲にあれこれと世話をすると云ふ。

十年、二十年のこの校の姿を、記者は日本の歩みと共に楽しみに待つた事にしよう。(S)



宗門の大學を語る



大正大學長

椎尾 辨 匡

立正大學長

石 橋 湛 山

駒澤大學長

岡 田 宜 法

司 會 吉 井 泰 順

東洋經濟新報社のサロンは、今宵は珍らしい顔ふれを迎へて色めき立つていた。

東京の佛教三大學の學長が相會し、大に宗門の大學を語ろうというわけである。今日は石橋湛山氏が今度、立正大學の新任學長となられたので、特に氏の本據たる同社で開かれた。

椎尾學長を迎えて立つた石橋學長は、隣の席に招じつゝ、懷舊談の口火を切られた。

石橋 「椎尾先生には、教はる機會はとうと

う無くなつて終りましたが、早稻田大學に御出でになつたのは、何年でしたか。」

椎尾 「明治四十二年に、姉崎先生の後を受けて早稻田に行つたのが最初です。村上、前田の諸先生が佛教を受持たれた頃で宗教學の方が私の分擔でした。」

石橋 「では、丁度私の卒業が明治四十年で村上、前田の兩先生には教はりましたが、先生には聴講の折がなかつたわけです。その後

はりながら、機會のないまゝに過ぎてしまいました。」

政界の渦巻の中に目立つ存在である「石橋湛山氏」、増上寺法主として全國巡遊に寧日の無い「椎尾大僧上」の面目を暫らくは思ひ出されない姿で、青春の時代への回顧がつづけられた。

椎尾 「今回は立正の學長に御就任で、お忙しい中に色々御苦勞でせう。」

石橋 「實は今まで私は一度も宗門との直接關係はなかつたのです。勿論、師僧も父もそれ〴〵日蓮宗の管長、立正の學長に就任した經歷から云つて、種々のつながりはありますが、私自身は全く宗門の外に在つて働いて來たのであつて、昔は一種の反逆見のように見られ、實は今回の學長問題が宗門から始めての呼びかけなんです。政治の方面では、椎尾先生は何回議會に出られましたか。」

椎尾 「昭和三年の變選第一回からで、三回出ました。名古屋から出たのですが、一度は落選しました。」

そこへ、駒澤の岡田學長が見えて、挨拶一しきり取り交された。記者は此の好機を逃さず、口を切つた。

「今回は石橋先生が立正大學に迎えられる

ことになり、佛教關係者のみならず、一般の社會からも注目せられて居ります。今晚の三大學の會合は珍しい意味を持つものと考えられますので、宗門大學當面の諸問題や、佛教の動向等についてお話願ひ、解決進展への手がかりを得られますれば何よりと存じます。」

と、申出たところ、石橋學長は前からの續きの如く、直ちに學校問題を取りあげて、

石橋 「私は先に申したように、學校の問題にはなれて居りませんので、これから研究もして行く積りです。立正大學としては、宗祖の立正といふことが大きな方針であることはいうまでもないことです。」

椎尾 「仰言る通り、立正主義による教育とということだけでは、簡単な一面が考えられますが、その他の點で色々御苦心や惱みがあることでせう。」

石橋 「私の出たのもその解決の爲でもありますが、唯立正の場合はその規模が小さいので、官學や早稻田・慶應等のように大きくなり過ぎて教育としては問題があらうと思はれますのに比べては、樂ではないかと見てゐる次第です。」

椎尾 「現状から見て、大きくなり過ぎては、その教育が不徹底になつていくべきで

せう。」

石橋 「大正の學生數の内、宗派外はどの位です。」

吉井 「全體の八割が宗門出身者、一般の學生は二割です。最盛時は一千五百人の學生でしたが、現在は約六百五十人です。」

石橋 「宗門の大學の場合、又私學の場合一般に考えて、必要なことは文部省のいうこともなく聞くが、必要なことは文部當局に止めさせたいと思ふ。そうでないと、經營なり管理に於て、不適應な面が是正されないのではなからうか。」

椎尾 「小さいものがそれぞれ大學教育の完遂を目指していくことは、意味のあることでもあるが、現在の如く、地方寺院の子弟が、寺院の疲弊と地方に於ける國立の増設の爲め、中央の宗門大學に入ることを差控えることになつていく傾向の強い場合、統合を考えることも必要ではないか。私は前に念願として佛教で一大學、そのうち必要に應じて東西に分立するといふことで、佛教各界を三回に亘つて動かし、先覺氏と組んで教化大學を西洋の神學系と比べて設立しようとして、文部省に建言したが、當時の帝國大學が承認せず、議會の運動も思ふに任せず、樞密院でも握り

つぶされて、遂に實現しなかつた。

その文科大學の機運が熟して、一大學を目指して、各宗派の合流進み出した。これには、明治三十七、八年に帝國大學に在學してゐた佛教徒廿五人が、各宗の重要な立場に在つてその合同の機運熟成へ大きく動いたことも、與つて力があつたところが、南條文雄氏が文部當局と交渉して、各宗それぞれに大學の設定が可能であるかと質問し、之に對して各部側から可能であるとの返答を受けて、大谷大學より設立申請が出た爲めに、混亂に陥つて、これも逆に駄目になつてしまつた。つづいて、龍谷が三日間徹夜で作製して申請し、駒澤も續く、立正、高野山もそれぞれ獨立して行つた。最後に残つた天台、眞言、淨土が大正大學を設立することによつて、大正七年からの問題が大正十五年に一應の解決を見た。」

不運な合同運動を寂しくふり返りながら、その語調には、壯者をしのぐものが感ぜられた。

石橋 「今日になべてみると、基督教大學も設立されるし、一方、世界佛教大學設立の要望もあるし、大きくまとめることを考えなければならぬのではなからうか。皆で相停つて、たとへ不完全でも、提携してやつていくことが必要なことと思はれる。」

岡田 「今のお話に出た大同團結の方向は正しいことで、全體が一度には困難だといふなら、この東京に在る大學が眞劍に取りあげて考へてゆく必要があらう。」

椎尾 「愚痴になるが、宗國法の場合、國の財産の二十億のある部分を與えて、大學教育の綜合施設が佛教に對して考えられたが、サイパンの陥落の爲、見送りになつてしまつた。この動きは現在でも明るい統合を目指して續けられてゐる。世界佛教會議の時、東西兩本願寺に聞いた所、今は駄目だとの見込であつたが、その折京都の眞宗の外の宗派を一つにまとめ、これを楔としてまとめることはどうかとの氣運がある。これに比べると、東京の方が全體としての連合なり統一なりの點は可能性が多いのではないだらうか。」

石橋 「前から、立正を何とかせよとの強い要望があり、師僧その他の關係もあり、考慮はしていたが、何分私としては、宗門の事には少しも關係せず、多忙ではあり、併せて大切な教育の責任を持てると思はれないので、ためらつていた。ところが、友人の二三人が力添をしてくれることになり、引受けて學長の職についた次第です。」

教育について、意見はありますものの、直

接の學園經營には經驗がないので、これから勉強していきたいと思つています。

椎尾先生から、今までの佛教大學統合の問題について、貴重な體驗を承りましたが、取敢えず、私は立正を良いものにするために、努力する考です。」

吉井 「いやどうも、いろ／＼承わりまして有難うございました。」

（八ページより）

「此願不満足、誓不成正覺」と震へる聲でやりました。「この罪なき人々が、極樂に往生しないなら、私は佛陀の教を罵倒してやるのだ」と、法藏菩薩の様な考へで眞劍でした。

私から云ふのはおかしい事ですが、この試寫會では、みんなが泣いてくれました。私も満足でした。

獨立プロでやつた爲、公開は未だされていませんが、是非これは見て欲しいと思つています。

佐藤 どうも色々有難うございました。

佐々木 こちらこそ。

京都だん王

「子供の家」

——寺院社會事業——

子供の家は、毎日午後二時から五時まで、土曜日は午後一時から五時まで（但し冬期は四時まで）及び日曜日を子供のために開放します。

一、私達の圖書室

ど本はあなたの心をそだてる大切な本を正しく読むことを學びましょう。

一、ゲームや音楽

楽しいゲームの中で、知らず知らずの間に自分の力で考えたり、實行したり、力をあわせたりする自治の力を養ふ。

一、子供會

童話、兒童劇、紙芝居、人形劇、幻燈、映畫、音樂等で明るく伸び／＼した子供になりましょう。

一、お誕生の集い

毎月お誕生會を開き、お父さまお母さまに来て頂いてお祝いと感謝の集いをしましょう。

一、日曜禮拜

日曜日の午前九時から、佛様の前で禮拜をしたり歌をうたつたりお話を聞いたりして、心清らかなよい子になりましょう。

一、健康相談

毎月第二日曜日の午前十時から會員の健康診斷を致します。

一、青少年相談所

毎週土曜日の午前九時から青少年に關する相談所を開きます。



祖母の追憶

——花まつりによせて——

樫村 治子

伊吹おろしに耐え難い寒さをかこつていたこの城下町でも、四月の聲をきく頃には、遠近の花のたよりも噂にのぼり自らの心も浮き立ちます。

春休みといへば、きまつて祖父母のもとで過していた私達姉妹は、花まつりも明日といふ日は、あちらの河岸、こちらの丘と花をさがすのに懸命でした。

菜の花、げんげ、たんぽぽ、名も知れないやうな野の花まで、籠にあふれるばかりに、摘みためてこれは花御堂を飾るのです。

白く塗られた木彫の象、そしてその上に天と地とを指して立たれたお釈迦様は、皆の集めた色とりどりの、美しい花に飾られた御堂の中にまつられました。

むせる様なその花々の匂は、甘茶の香りと混然となつて、今もそこはかとなく、幼い日への郷愁となつて思ひ出されます。

大垣佛教座談會の春の行事、花まつりの思ひ出です。

當時故郷に歸つてその餘生を宗教運動に送つていた祖父母。

いわゆる寺まゐり式と異り、宗派を超越しての新しい佛教活動として、多くの講師を招いていたのが、この佛教座談會だつたのです。が、椎尾辨匡、中村辨康、鷗鳥敏、西田天香、中野尅子、高神覺昇、

友松圓諦等今私が思ひ出せるだけでも、實に多くの先生方に御交り頂いた様でした。

ところでこの佛教座談會も、祖父といふよりむしろ祖母の力が大きかつた様です。

設立當初、かうした新しい啓蒙運動で、どうやつて、無關心な人達を導いていくかその困難は想像以上だつたと思ふのですが、祖母は率先宣傳につとめました。

ポスターを、ビラをと、廣くないとはいえともかく大垣市中、あちらの町、こちらの町と、糊と刷毛を持つて歩き廻りました。

小柄な祖母が、改良服とやら、その頃珍らしい黒の上つばりを羽織つて、炎天の眞晝、雪の朝、小走りにゆく姿は、やがて町の話題になりました。

「又、何ぞ、ありますそやうな」

「桑原の奥さんが見えますがな」

そして講演會の當日となれば、講師の接待は云はずもがな、來會者の爲の下足番に寢食を忘れての懸命さ。

六十を越した祖母にどうしてこんな熱があつたのでせうか。

祖母は舊士族の生まれ。幼少にして両親に別れ、伯父の家に引き

とられて多勢のいとこ達と育てられたのですが、はげしい環境の變化に多くの精神的苦悶を味つたのでした。

そうした折自ら求めた信仰が唯一の慰めとなり力となつてやがて祖母の一生の生活の支柱となつたのでせう。

公職を退いた祖父と共に歸郷した時。それが佛教座談會といふ形になつて表はれたのだと思はれます。

ともかく祖母は、若い頃から實行力のある人でした。

あらゆる方面に積極的で、華道、茶道、謡曲は一通を學び、殊に盆石では新遠山流の家元となり、當時天覽の榮を賜つた程、優れた力を持つていたのですが。

宗教に對するあの打込み方が、私には不思議でなりませんでした。

しかし、やがて、祖父も亡くなり、やつと上京した祖母と毎日の生活を共にする様になつて、おぼろげながら、その人となりが分る様になりました。いゝえもう何回忌かを過ぎたこの頃になつて、激しく理解出來たといふのが本當でせう。

「受食者は佛家三命脉也」

かつて恩師友松圓諦先生が、法句經の扉に書いて下さつたのを見ても、その頃の私の心境が伺はれます。

信仰の必要性を身を持つて感じていなかつた私。

「日當りのいゝ家にいれば、殊更日光の有難みが分らないのと同じですよ」と私の疑問にその時先生の答えて下さつたものです。

祖父母から、父母へ受けつがれた宗教的雰圍氣の中に育つたその頃の私には、朝夕の佛壇への禮拜も、それが特別の行事で無く、食前の祈りも又習慣的にたゞ生活にしみこんだものでした。

幸福な、いえそれさえ意識しない毎日に私には本當の意味の宗教

は縁の遠いものでした。

「今日の試験とてもむづかしかつたの。でも觀世音南無佛、三邊位いつていたら、問題解けちやつたわ」

そんな事をいつていた私。何と無邪氣な現世利益だつた事でせう。その私も父を失ひ、母を失ひましたが、もつとも傷められ易い年頃を、この祖母と暮す事の出來たのはどんなに幸ひだつたでせうか。それでも祖母は信仰を強いる事はありませんでした。

富士山の頂上をきわめるのに、澤山の登山口がある様に、どの道を選んでもいゝといふ祖母は、だから宗派に抱泥しませんでした。そして私の机の上には、バイブルが、哲學書が、聖典講義がのせられていました。

讀んでも讀まなくても、祖母は私の手近にそうしたものを置いてくれたのです。

私はいつとなく關心を持つ様になりました

「ほうろくは赤らめが大事。人間はあきらめが大事」こんな事をいふ祖母には、老人の愚痴を聞いた事がありません。

八十一で亡くなる數ヶ月前まで、健康な體に盆石の指南をし、花作りをし、針仕事をし、暇を見ては歌舞伎に、映畫に。感激すれば「たゞいておやりよ」と傍の者に拍手の催促。明るい性格は皆から愛され慕はれていました。

教育としては寺小屋程度の祖母。

しかも、その日常の一言一句に、深い信仰の裏付けのあつた事が、今にして私の心を捕えているのでせう。

近づく花まつりに、やはり憶ひ出されるのは祖母の事です。



忍徴上人のこと

—— 獅谷遊記 ——

大橋智譽史

幾度びか京の町を訪ずれ、古寺をたずねもしたが、獅谷にまで足を運んだのは今日が始めてである。黒谷に詣でて、細流をほとりに、東山如意嶽のふもとを北にとつて、物靜かな、そして掃き淨められた雨あがりの法然院に金毛藏を訪ねたのは、卯月をはじめ四日のことであつた。總門をくぐり、山門をすぎれば「不許羣辛酒肉入山門」の碑は、曾つての捨世律院^{しぜりつゐん}を物語るかのように寂しく立つていた。境内には沙汰が布かれ、松柏はうつそうと茂り、池泉は清涼として幽邃をきわめ、所せまきまでに建てられた堂宇とは何となく調和がとれていた。刺を通ずれば山主は不在であつたが、一心院主の御厚意で連絡もあつてか心よく請じ入れられ、堂内を案内せられた後、遠く西山が見える一室で靜かに寺史は聞いたのであつた。

—— 法然院のこと、忍徴上人^{にんてう}の事など。上人はこゝの二世を繼ぎ、宗風の宣揚に心をくだいて捨世地を開いた。

一

時は正保二年（一六四五）正月八日のことであつた。尾張藩に仕えていた二見氏は流人の身となつて江戸に移り住んでいた。その微祿からはなれた貧窮武士の家に勘太郎は産聲をあげた。翌月の十日

には母が、五月には父が此の世を去つて、二人の姉に育てられたが、姉は父の遺言「汝成人せば早く出家し佛道を修行して成佛せよ」の聲忘れることなく、九歳の時、すゝめられて増上寺の法譽直傳の門に投じ、明暦元年（一六五五）には髪を剃つて名も傳貞と改めたのであつた。

幼な心にも身の不関を感じもしたが、十五歳の時には又もや師の示寂に遇つた。父母と師を早くより失つた傳貞は其の身のやるせなさに心をくだき、いよく無常の念をおこし、追慕の思い止むことなく、その影を模寫して奉すること、恰も生けるが如き敬けんな態度を以てしたと云う。しかし悲嘆は大きな抱負と希望とを以て學問への精進へと轉じさせつゝあつた。岩槻の淨國寺に、萬無を訪ずれたのも、又彼のすゝめによつて増上寺の林間についたのもそうであつた。

だが傳貞の生涯には天折した學友萬察の靈にとりつかれたこと、江戸出火のこと等あつて隱遁の志も早くからいだいたらしく、二十歳の時（寛文四年）幡隨院で知關から宗戒兩脈を受けてから彼は日毎にこのような考えをもつていた。そして名を忍徴と改めて、飄然出遊を志し、上洛の途すがら江の島辨才天や江州木ノ本の地藏尊、

竹生島辨才天にも詣でて諸願の成就を願つて念佛の別行を修し、洛に入つては知恩院の祖廟にも、祇園の神祠にも、清水寺にも歴参したが、何等得ることなく、求めるものを求めて求め得なかつた上人は、辰野安女に神道の秘奥もきいた。だがこれも窮極のものでないことを悟り、更に檳尾山や泉州大鳥神鳳寺の門を叩いて持戒念佛の修行を請うたが宗旨が異なると云うことの故に、許されなかつた。この時の悲嘆程大きなものもなかつた。最後の目的は一擧にして打ち破られたような形であつた。しかしこの持戒念佛を何らかの形で實現せねばと云う氣持で、上人の胸は一杯であつた。

二

この頃の佛教界はどうだつたのだらうか。徳川幕府の保護を受けて本寺末寺の制度が確立し、寺請制度も強固になつていた。そしてキリスト教を信ずることは勿論でなかつたが、檀家が寺からはなれることも禁じられていた。その反面、僧侶は紫衣、香衣の色をほこつて立身出世をのぞみ、本來の使命である教化と布教とからは次第に遠のきつゝあつた。そして徒食と安逸にふける僧が多くなつて來た。一般の人々から反感を買ふ僧侶も生れつゝあつた。おそろしい世の中がおとずれてきたのである。

このような世相の成行になやみ、腐敗した教團を匡正し、迷える人々を救うにはどうすればよいか、又一「宗祖にかえれ」と説いた捨世律僧も出て來た。忍教も考へに考へ抜いた。眼は内外に向けられたし心は古今に馳せ、或は他國の僧にその用心をたゞいて心の悩みを解決して行かうとされた。その眞剣ななやみはどうしても阿彌陀佛の本願相應の念佛によらなければ解決されるものではないと喝破

して、いよいよ稱名念佛にはげまれ、訛略の念佛もいましめられた。念佛は南無阿彌陀佛と正しく唱えるべきであつて、いさゝかなりともおろそかに、訛略に流れてはいけなさと常に申されていた。延寶四年(一六七六)十月、吾孫子の淨福寺に居つた頃、八つの誓願(八齋戒)を自から誓つて戒を受け、快圓を證明師と仰いで菩薩戒を受けた。又此頃五會念佛(六字ずめ念佛)も始めた。これはシナの法照の「五會法事讃」によつて、五種の音聲をもつて彌陀三尊を念佛するのを云うのであつて、也に獅子谷五會念佛と云うのがそれで、これを聞くもの隨喜の念をおこして、信を起さしめたと云われる。

三

四年後の八年(一六八六)は恰かも高祖善導大師の一千年の忌辰に當つていた。その準備は早く十年前から着々行われていたように、忍教は報恩のために同七年「善導大師別傳纂註」をものしたが、大師と云う尊稱を用いたのは此書が始めであつた。それ以前は禪師とか、阿闍梨、和尚と云つて人によつてまち／＼で、三祖良忠の頃までは大體和尚と呼んでいたが、尊稱の一定したことは此忌の一大收穫であり、第一の記念とも云うべきものであつた。

時の知恩院大僧正萬無も忍教と考へを同じうし、彼も僧風が紊亂して行くのを憤慨していた。たま／＼彼はこの善導の忌辰に當つてこのように宗風が地におち、法然上人が在世中別時念佛を修せられ又その門人住蓮、安樂が六時禮讃を修した鹿ヶ谷の舊蹟があれば、いゝるのを嘆げいて、忍教に謀つて祖蹟を復興し、般若道場となさんとした。そこで將軍家綱に具申して壽氣山の麓に、二千餘坪を

拜領し、同八年土木工事をおこし、翌九年五月に至つて諸堂は全く成り、寺法十七條をつくつて律院とした。これから後の忍徹の生活は此處、法然院を中心に始まるのであつて、大藏經の對校をなされたのも、麥形念佛をはじめられたのも、多くの著述をのこされたのも全てこの善氣山麓の、法然院で、彼の集められた書籍は金毛藏の奥深くに收められている。かくて造營された鹿ヶ谷の復興は亦一千年忌のよき事業でもあつたのである。

四

上人は念佛のひま／＼に經典を讀まれるのを常としていた。經典も年月の立つにつれて筆寫の訛誤や刊本でも逸脱があつて、讀んで行く中に意味のはつきりしない點のあることを發見して痛切に遺憾に思つていた。そしてその憂慮は年久しかつた。何とかして現存している諸本との對校を試みたいとの念願は「夫佛の正法、世に住するは一切經ある故なり。一切經ありといへども文字あやまる時はなきが如し、正法世に住せば邪法は自ら滅す。然ば今世に當つて佛恩を報じ、國恩を報ずることは一切經を對校するに若はなし」と云う、黄栗鐵眼版と建仁寺の高麗藏經と對校して誤りを正した定本大藏經をつくらんとする計畫によつて現われた。しかしその業は、容易いわざではなかつた。六千餘卷の大藏經を一字一句ゆるがせにすることなく校合するのであるから、勿論一人では出来ないで、増上寺から博學の所化十四五人を鹿ヶ谷に呼び、始め一卷ずつ借覽して、建仁寺まで校合した高麗藏は近衛基熙の取計いによつて一度に五十函ずつ貸り出して、その全てを鹿ヶ谷で行うことが出来たのも幸いであつた。されど一度ならず三度までも正確を期してなされた校合

は、寶永三年（一七〇六）二月から五月の歳月を閲して七年の四月ようやくその業を終えた。この業績は天明八年（一七八八）建仁寺の原本が焼失したのち／＼までも内容を知る便が得られたし、明治時代に入つて刊行された「正字藏經」や「縮冊藏經」にもこれが底本として役立つたのである。

五

これより先、天和元年から二年にかけては世をあげての凶作の時代であつた。飢民は關の東西を問わず、おびたゞしい數に上り、加ふるに江戸では本郷臺より火の手があがつてその中心部を焼失した。この時、僧侶が飢民の救済に懸命にたずさわつたのも稀であつたらう。江戸では了翁が、大阪では鐵眼と南源性派が、長崎には千獸性按や慈岳等の禪侶が出でて活躍し、京都では淨土宗關係の人が救済に乗り出していた。大雲院の高譽性愚は十萬人の助縁を得て飢餓人の救済につとめて、その數は二十六萬六千二十九人にのぼつたといわれ、誓願寺でも法輪寺でも救いの手をさしのべていた。人々は米粟の高騰におそれ、尙ほ購うに敷なき様を見ては他國に移らんとしたが、これとても道すがらにして飢死する者も幾千人とも知れなかつた。忍徹は京洛の僧達と相談して飢食をなし、雜費をちよめて飢えたる人々に施した。その施行を見て師に隨喜して施主となつた人も數多く、又示すに念佛を以てした。その行によつて生きる道が自然に開かれて行つた。

かくしてその徳は次第に天下に知れわたりつゝあつた。行狀記に「化益日々に盛なり、師の望みます／＼深し、都鄙の僧俗師の徳をしたい參詣し、日課念佛を誓ひ、或は先亡の追福回向を願ひ、或は

剃髮得度し、或は臨終の知識に請待し、或は師の一言の教化を受け、安心決定する者等其數を知らず」と記されている。如何にその徳の高かりしかを思ひ知ることが出来るであらう。

六

その他、上人は黄檗獨湛の作福念佛圖を印施したり、日課數珠を五十四に麥形（まきぎ）の二十をそえて二連珠數を考えたり、多くの著述をものされたりして淨土宗史の上に幾多の業績を残されたが、遂に病のおかす所となつて、正徳元年（一七一）十月十一日、年六十七を以て西方淨土の彌陀のふところにかえられていつた。丁度、この年は宗祖法然上人の五百回忌に當つて居つたので、病臥の中にも、知恩院の御廟前に唐銅の蓮水鉢を寄進し、東漸大師號の勅諡宣下の御忌には感涙のうちに念佛三昧の行をつゞけられていたのに。

閑寂な中にも整つた堂宇。桃山御殿の遺構は經藏と共に印象的だつた。掃き淨められたすがすがしい境内、それはとりもなおさず捨世派寺院としての面影を今に幾分でも残す姿でもあつた。こゝにたゞずめば八百年のありし昔、安樂・住蓮が御所の宮女鈴虫松虫を出家せしめた物語り、それによつて後鳥羽上皇の逆鱗にふれて兩人が斬に處せられたこと、法然上人また事にふれて土佐にまでも配流されたことなど次々に思い出されて感無量だつた。歸りには近くにある西山派の尼寺——安樂寺に住蓮安樂の墓を訪ね、インクラインを下つて西福寺に法然上人が源智に與えた阿彌陀如來の像を拜んで、心ゆくばかり回顧をつゞけるのであつた。

（大正大學淨土學研究室）

阿彌陀經で育つた松

——沼津千本松原——

日本のナボリと言はれる沼津の海岸は、今「千本松原」として、伊豆名所の一つとなつてゐる。富士の靈峰を背にしたこの松原は、前に白砂と、紺碧の海を持つて、正に絶景である。然し、この美しい松原が出来上るについては、秘められた物語りが、今尚、人々に依つて語られている。

今を去る三百有余年前、増譽長圓上人といふ旅僧が、この地を通りかゝつた。當時、この邊は沼地で葦が茂つて居た。吹く潮風は、農民達の粒々辛苦を荒らしてしまつた。何とかしたいと言ふ望みも、植える松の防風林をことごとく枯らしてしまふ潮風で、如何ともする事が出来なかつた。

長圓和尚はこの事を聞いて同情した。「よし私の發願で何とかしましょう」と言つた上人は、早速千本近い松の苗木を集めさせた。そして一本植える毎に、一卷の阿彌陀經をあげて、終に千本を植え終つた。不思議な事に、お經をあげられたこれ等の松は皆育だち、完全な防風林となつた。農民達の喜びは大變なものであつた。こうして出来たのが、今の千本松原である。

長圓上人は、今この濱に近い千本山、乘運寺の一角に靜かに眠つて居られる。そこには、歌聖若山牧水も、この松の響きを聞きつゝ眠つてゐる。

幾山河こえさりゆかばさびしさの

はてなむ國ぞ今日も旅ゆく

とは、この松原の中にある歌碑である。

松原は、人生の無常も知らぬげに、吹きつゞけている。

訪 問 記

木村篤太郎長官

編 輯 部

隊の親になりたい

今をときめく(?)保安隊の長官を、信濃町の私邸に訪問する。保安隊の禮讃にではない。長官が人生修業一入の方だと聞いていたからである。

いかめしい門構へのくぐりから入つて玄關のベルを押す。(勿論警官の許可を受けてからだ。)廣い立派な應接間に通される。女中さ

んが茶と菓子を持つて来る。何となく心細くなる。

「ヤア、どうもおまたせしましたね」余りの愛想よさに一寸たじろぐ。寫眞でみる長官とそっくりだが、和服姿でこんな應待を受けると、仲々名文句が出て来ない。全く好々爺と言ふ感じだ。

「立派な家ですね」

「いやあ。これはね、門弟達が探してくれたのだよ。つい最近家族が歸つて来たと言う有様でね。今まで市川に居たので不便だったよ。孫は此處から市川の學校通ひだ。ハッハ……」

これでどうやら記者も落ち着きを取りもどして、ぼち／＼と本腰の質問にかゝる。

「今度保安隊長官になられたのですが、大臣には適任と言ふ噂ですが」

「なあーに。自分には重荷ですよ。然し人間は死ぬまで人間完成の道を歩まねばならぬと言ふから、その積りで頑張るよ。自分としては長官としてより、保安隊員に親と仰がれる様になりたいね」

とつばじめから人間完成の話が出て来た。成程。

「保安隊に對する何か抱負は？」

「そうだね。色々あるが、立派な保安隊員を養成したいね。それには先ず教育だ。もつと大學出の學生が来る位でなくては駄目だね。そして、家庭的な雰囲気の中で、明るい生活をさせたいよ」

大分、昔の軍隊とは違ふ様だ。陸軍大臣がこんな事を言つた事を今まで聞かぬ所をみると、やつぱり保安隊は軍隊ではないかな。年に似ず若々しい聲である。

居合と人生

「大臣は、何か人生修養につとめて居られると聞いています」

「先ず居合をやつてゐる。毎朝ね、勿論この頃は、忙しいので充分やれないが、出来るけだやつてゐるよ」

「健康増進と言ふ所ですね」

「違ふよ。それもあることはあるがだね、一日に一度は無我の境に入りたいのだよ。總てを忘れて、居合ひをやつてゐると、人生の本當の味が分つて来るよ。一日の仕事もこれから始まるのだ」

「無我」と言ふ言葉がほとぼしり出たのですかさず、

「何か佛書でも御讀みで？」

「いや、別に。唯念佛と自己流の經文を讀むがね」

と、自己流の經文なるものを簡條をあげて説明されたが、餘りべら／＼と語られたので一々書き取る暇もなかつた。何せ人生修養の要道を説いたものの様ではあつたが。

長官は朝寢だと言ふ。それでも七時には起きて、居合ひが始まると言ふから、この大邸宅も物々しいものだらう。

「三笠會館での木曜會にはよく御出席と聞きますが」

「あゝ。然しこれも仲々忙しくなつてね。

然し出来るだけ行きたいと思つてゐるよ」

因に、木曜會とは毎週木曜に三笠會館に集つて中食を共にする會で、館長谷善之丞氏のきも入りとか。出席者には長井眞琴博士や、安藤正純代議士、おなじみの村田嘉久子女史等が居られる。知名の士で佛教に關心を持つ人々がなごやかに話す會である。

「辯護士の方は如何ですか」

「この世界は仲々面白いよ。辯護士には階級がないからね。而も何時の間にかそこに階級の様な差が出て来る。人間の力に應ずるのだらう。こゝに興味があるね」

「保安隊もそんな所ですか」

「いやあ、まだ何と云ふものもないね。生れた許りだから傳統と言ふものはない。法務廳あたりはちやんと傳統があるからね。こゝで一つ新しい傳統を打ち立てたいね。前に言つた様なね」

日本を守るもの

長官の肩にかゝつてゐるものは仲々大變のことだらう。やれ自衛軍だ、やれ軍隊だと騒いでゐるが、この長官との談話では一向にそんなものが出て来ない。それでも、日本を守るものは保安隊であると言ふ事だけは、その口論にはつきりしてゐる。

平和を願ふ國民と共に、ともかくおだやかな世界が望みたいのだが、この長官に何と御願ひしたらよいのだろうか。

最後に大臣の最も大きな問題に恐る／＼一寸ふれてみた。

「自衛軍はどうですか」

「曰く、言ひ難しだね。もしもこれについて一言すれば、國際問題上重要な波紋を興へるからね」

仲々うまく逃げられてしまつた。

「だがね、この事だけは確かだね。萬一米國が撤退したら、必ず侵略者が來ると言ふ事

はね。この時敢然と守るのは、我が自衛軍であると言ふ事だよ」

やつぱり軍隊が必要なのかなと頭をかしげる。大臣の話を聞いてゐると、いつの間にかその様な結論になつて来る。

「それでは憲法改制に自信があるのですか。國民の投票の過半数は得られますか」

「自信ないね」

全く正直である。此處に日本の現状がある。長官は現在の國際狀勢をもつと國民に知つてもらはねばならぬと云ふ。この對立する世相を、どの様に裁いて頂くのであらうか。大きな課題を與へられて未解決のまま、辭去する。この點は讀者に御考へ頂こう。

誌上法律相談

東京第二辯護士會所屬

解答者 辯護士 荻原貴光先生

○刑事、民事何でも法律に關する問題を具體的に(但し問題中の姓名等は匿名で宜しい)書いて質問して下さい。誌上でお答へします。

○發表する質問者名を匿名にするか、否かを明示して下さい。

○送り先 —— 淨土編輯部法律相談係



阿彌陀經の話

(完)

藤井實應

「舍利弗、汝が意に於て如何、何が故ぞ名けて一切諸佛所護念經と爲す。若し善男子善女人有りて、是の諸佛の所説の名及び經の名を聞かん者は、是の諸の善男子善女人皆一切諸佛に共に護念せられて、皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得。是の故に舍利弗、汝等皆當に我が語及諸佛の所説を信受すべし。」

前の六方段に於て、一切諸佛の護念せらるる經を信ぜよと説かれ

た釋尊は、何故この經は一切諸佛の護念せらるる經といふのか、以下そのわけを説いて信を勧められるのであります。

現當二益——「善男子善女人（佛教の信者、即ち今、法を聞いている人たち）よ、この諸佛の説かれる阿彌陀佛の御名及び經の名を聞くものは、この現世に於て一切諸佛の念力に護られ、退轉することなく、たゞ前進することが出来て、未來には、阿耨多羅三藐三菩提（無上正眞道と譯す、即ち佛のさとり智慧）を得させて頂ける（惠心僧都、法然上人御釋の意）それ故、汝らは我が言葉及び諸佛の説かるゝ所を信すべきである」と信を勧めたもうたのであります。阿彌陀佛の御名を稱えて極樂に往生する道をふみゆくものは、現世に一切諸佛に護られ念ぜられて退轉することなく、未來には佛と成ることが出来る、現當二世利益とはこのことであります。

「舍利弗、若し人有りて、已に發願し、今發願し、當に發願して阿彌陀國に生ぜんと欲する者は、是の諸の人等皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得て、彼の國土に於て、若しは已に生じ、若しは今生じ、若しは當に生ぜん。是の故に舍利弗、諸の善男子善女人、若し信ずること有らん者は當に發願して彼の國に生ずべし。」

發願勸信——次に三世（過去、現在、未來）にわたる發願を説いて信を勧められるのであります。即ち、前世に願を發し、或は今世に願を發し、或は將來の世に願を發して阿彌陀佛國に生れようと欲うものは、十人は十人ながら、百人は百人ながら、みな無上正眞道の

佛果退轉しないようにならせてもらえる。即ち彼の極樂に既に生れ、今生れ、當に生れることができます。それ故に「若し信ずることあらんものは、まさに發願して彼の國に生ずべきである」と勧めたものであります。發願については前にも述べましたが、衷心からの願ひであります。釋尊のお勧め、諸佛のお護り、阿彌陀佛の大悲願力が、私たちの胸にも至りといひて、私らにも與えられてあつた眞實の願が心底から湧き出るようになったのであります。この至心に阿彌陀佛國に生れたいとの願あるところ念佛となつて、諸佛に護念せられて退轉することなく、精進の力が出てくるのであります。

「舍利弗、我れ今諸佛の不可思議功德を稱讃するが如く、彼の諸佛等も亦我が不可思議功德を稱説して是の言を作し王はく、釋迦牟尼佛能く甚難希有の事を爲して、能く娑婆國土の五濁惡世の劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の爲に、是の一切世間難信の法を説くと。舍利弗當に知るべし、我れ五濁惡世に於いて此の難事を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の爲に難信の法を説く、是を甚難と爲す」

諸佛の稱讃——諸佛と釋尊とが互に讃めあわれることを擧げて信を勧め、またこの經の正宗分(本文)の結びとせられるのであります。釋尊が六方恒沙の諸佛の不可思議功德をほめたゝえられる如く、六方諸佛も亦釋尊をほめたゝえられるのであります。諸佛同體でありますから、心はとけあい、互に尊敬しあつて、お互に讃歎せずには

おれぬのであります。人間はともすると他の善いことでも何かと非難したりするものですが、それは「我」があるからであります。諸佛の世界に「我」はありません。自他不二、無我の世界では、稱讃せずには居れません。稱讃することによつて共に益々その中味が豊かになり、善き事が現われ擴がつてゆくのであります。

難事——諸佛は釋尊を讃歎して——「釋迦牟尼佛は、説き難き法を説き、値い難き希有の法に値わしめ下された、よくもこの娑婆(忍土と譯す、この現實の世界は忍耐せねば生きてゆけぬ世界ゆゑ忍土という)國土の、時代が濁り(劫濁)思想も濁り(見濁)わずらいはげしく(煩惱濁)道徳がすたれて人々が濁り(衆生濁)命も短くなつた(命濁)この五濁の惡世に於て、無上正眞道の佛果を得られて、一切衆生の爲に、極めて信じ難い法を説かれたことである」とほめたゝえられるのであります。そして釋尊もまた自ら「我れ五濁惡世に於て五濁にもします、この難事を行じて、無上正眞の證りを得て、一切世間の爲に、この信じ難い法を説いたのである。これは甚だ難いことである」と申されたのであります。

難信の法——阿彌陀佛の極樂國土に生るゝ念佛の法門は信じ難い法門であります。「大經」にも「若し此の經を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎたる難きことなし」とあります。何故に信じ難いのでありましようか。

念佛の道は理智的な分別によつて聞き分けることのできる教ではありません。この阿彌陀經にも智慧第一の舍利弗が、凡愚に還つて、終始黙々として聽聞しておられる、そこに學ぶべきものがあるので

はないでしようか。智慧あるものは、ともすると、その智慧をたのむが故に智にとられ易いのであります。智にとらえられていてはこの淨土の法門には入りがたい、智慧あるものは智慧を超えねばなりません。智慧を超えることは愚痴に還つた相であります。智慧や徳ある人も、その智徳にとらえられている限り、眞實にふれることはできません。ましてや智徳のないのを自覺せず、愚惡の殻を固くして智徳ありとしているようでは念佛往生の道は領解されぬのであります。法然上人は御遺訓一枚起請文に「念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じうして、智者のふるまひをせずして只一向に念佛すべし」と仰せられました。念佛を信ぜん人の心得をすべてこの中にふくめてお示し下されています。智慧第一と稱せられた法然上人が、叡山に於ける三十年の學修も、理智の苦しみ、論理の悩みではなかつたでしようか。人々からは智慧第一の法然房と稱め讃えられたが、自ら省みてその智慧にては、生死しじを離れることのできないことが分りました。當時の大學者に會つて法門の論議がせられたが、たいていはうぬぼれにすぎないことが分り、學問や理智では人生の苦惱より解脱することはできぬ。「聖道門の修行は智慧をきはめて生死を離れ、淨土門の修行は愚痴に還りて極樂に生る」と智慧第一と稱せられたその智慧を捨られました。そして「愚痴の法然房、十惡性の法然房が念佛して生せんというなり」と愚痴に還つて念佛の一行をはげまれました。かくして八十年の御生涯の結語としてこの一枚起請文の言葉となつたのであります。

信は思慮分別が盡きはて、不思議底（考えも及ばぬところ）の世界に入つた時に生れるものであります。一文不知の愚鈍の身になす

ことは、知つていることを忘れよとか、馬鹿になれとかいうことではありません。智慧をたのまぬことであります。それは愚鈍の身と同じであります。理知や論理を輕んずるのではなく、それを力として頼まぬことであります。舍利弗が終始默々として至愚のすがたをあらわしているのは、その智慧をたのまぬすがたであります。人間はともすると高ぶり易いのであります。「傲慢と弊と懈怠とは以て此の法を信じ難し」と『大經』にもあります。高く思いあがる時、この法は愈々遠ざかります。それこそ難信の法となるのであります。たゞその自らの力をほこつたり、高ぶる心などを省みて、教説の前に謙虛にひざまずくべきであります。謙虛になり法の前にひざまずく時、此の法は近くにあるのであります。凡愚の行き易い道は、凡愚であると自覺反省されるところに見出されるのであります。愚鈍なるが故に、無智なるが故に、信ずるの智慧が與えられます。一文不知の愚鈍の身になつたものにとつては、一向念佛は實にゆき易い近道となるのであります。どうにもならぬ一生懸命のところへせまつてくれば、こんな容易なことにはないのであります。たゞ信じて一向に念佛するばかりであります。

一文字も思ひ分かざる身となりて

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

となるばかりであります。

こゝに一言注意しておきたいことは、難信の法は難行を意味するものではないということです。却て難行の故にそれはまた易行であります。念佛は男女老幼、行住坐臥をえらばぬ、だれでもいつでも、どこでもできる易行であることは改めて申すまでもないこととあります。

「佛、此の教を已りたもうに、舍利弗及び諸の比丘、一切世間の天人、阿修羅等、佛の所説を聞いて歡喜信受し禮を作して去り。」

流通分(結文)——かくして釋尊の阿彌陀經の説法は已りました。

こゝに舍利弗尊者をはじめ、諸の比丘、天、人、阿修羅等みな釋尊の説法を聞き歡喜し信受し禮拜して去りました。私たちもまた阿彌陀經を聞き了つて歡喜信受し、諸上善人俱會一處の阿彌陀佛國に生れ、佛とならんと願を發し、念佛申して、諸佛に護念せらるゝ身となり、明るく正しく和のある念佛の生活に精進し、阿彌陀佛、釋尊、諸佛によろこばるゝ身とならんと願うのであります。

(合掌、了)

花

山中不二

花の世は美しい。人の世もかくありたい。今日は一切を捨て、花の觀音御参りに行く。堂守の町田先生は、不自由な此の山に不自由も知らぬげに不平も云はれず一年余の月日を送られた。先づこの先生に挨拶し、山を登る。堂を開き座し心から参拜する。此の觀音の創建者であり願主である私の参詣は、心中他の人々と大きく異なるものがある。堂から見ゆるあたりの景色を満喫し静かな山道を下れば、庭に焜爐を持ち出し茶湯を沸かす。

あたり一面花で、今を盛りと咲き競ふ、花はみんな何時何處で見ても美しくありたいと願ふ。

せまい小屋内で先生と茶を頂く。

先生の口からは、カルミヤの花盛りに來られたあの寫眞屋さん宅に其後まねかれた話、又寫眞屋さんが白桃を贈り届けて下さつた事やら、工藤氏が玉うどんを澤山下すつた事、山住でも永くなれば次第に知人も出來、せんべい御菓子を賣りに來る婆さんもあれば、大工を轉業してアサリを賣りに來るもの、皆んな山に來る人は好い人で、悪人は無いと近況など、共に話された。

此の内の寫眞屋さんとは近くの水道の貯水池の工事過程を記録寫眞に納めに來られるとかで、この小屋にも時折寄られるとか。

先生は寫眞屋さんに就て次の様な事を語られた、あの人は普通の人物ではない。

婦人の客が訪ねて來て、寫眞を撮つて頂きたいのですが戦災で夫と財産を失ひ金がないので寫眞代がないと思案して居る。無料で撮つて上げましょう、と心よく承諾する。連れて來た十才位の女の子を撫で乍ら、寫眞を撮るには着物が無いので困つた、と云ふ。寫眞屋は此の子を連れて町に出で、服屋に入り此の話をし服を買ひ着せてやつた。服屋は五百圓まけてくれた上に少女の顔にお白粉をぬつてくれたそうだ。私は此の美しい話を『有難いと云ふ事は、此んな事であつて皆んな花のように美しく世を送ると云ふ事、有り得ないよううな事を爲す事、つまり有難い事を爲し、奉仕と感謝の誠を共に送る事であると思ひますねえ』と。

歸宅の道々私はその婦人が花の心の持主となる事を祈つてやまなかつた。

新 興 宗 教

齋 藤 昭 俊

新興宗教と一概にのべられるものではないが、靈友會系統のものを概説して、新興宗教がどんな特長と、缺點をもっているかを見たい。

文部大臣官房宗務課編纂の「佛教系新興教團の種々相、その起源に關する諸問題」を見ると佛教系新興諸教團の系統別として日蓮主義諸派系新興諸教團として靈友會教團系は、靈友會教團と思親會、博愛同志會教團、妙智會、法師會、佛所護念會、妙法教、德行會、靈友正義會、妙道會教團、靈友大慈會教團の十二種類に分別されている。これら多くの分派を親教團から生み出したのは文部省の調査では思親會は親教團との意見の相違から、立正交正會も同じで、妙智會を始め殆んど全部が親教團の紛擾とそれに基く意見の相違から分派したことになつてゐる。しからば親教團の靈友會というものはどういふものであつたらうかということからのべて見たい。

靈友會の創立者は久保角太郎という人で、生れは青森縣、上京してから宮内省笠原技師の下で工手として働いていた。ところが當時西田無學氏が佛所護念會という在家佛教の集りをもつていた。西田氏は子供の示唆によつて法華經、戒結二經（普賢經、無量義經）に

所依することになつた。特に二經を重んじて、それを自ら實踐していた。戒經に説くことは人格の陶冶であり、結經に説くことは慈悲の精神であり、懺悔の精神である。こういった法華經根本の菩薩行乃至は日蓮上人の心持をもつことが出來ず、悪い面のみをとつて、他人の人格を尊重することを忘れてしまつたのが既成日蓮宗である。こういう宗に對して所詮満足することが出來ず、その日蓮上人の本當の慈悲の精神をもつて、お互佛性をもつ人格を敬うと同時に、煩惱によつて佛性が蔽はれて、佛との交渉をたち排他的になることは智慧のないことによるのであつて、正見をうるためには釋尊の云うことに従つて反省し自覺して、それを佛の境地に到達するまで、佛の鏡に自己を照らし、懺悔し、努力精進してやまない。その第一になすべきことは報恩感謝ということである。こゝに佛所を立て、佛の慈悲を見出して、佛の段階を一つ一つ踏んでゆく。西田無學氏は實際に懺悔慈悲行を身を以つて實踐した。その教へと實踐とを西田氏亡き（大正七年九月三十日）後うけついだのが増子正學氏である。この増子氏（現在吉祥寺在住）の處に久保角太郎が來訪し弟子入をしたのが大正九年であつた。ところが

久保はこの教を正しく解することができず病氣平癒の加持をやつたりして人を集め、北千住邊に靈友會を始めた。そこで増子氏はかようなことをなすのでは釋尊出世の意義も失はれるし、吾が教へを受ける資格なしとして大正十三年に破門を云いわたした。増子氏は久保がこのようになつたのは恐らく一月にもらつた家内が三月になくなつてしまつたことによるらしいといつて居られる。

それから彼の一人舞臺となつて、教理の法華經、戒結二經を看板として、佛所護念會で學んだ報恩感謝の念から釋尊を父母とする祖先崇拜が、單なる自らの祖先を自らが拜するといふ形にかはつて來て、そこには何らの教理的裏付けもなくなつてしまつた。

そして信者からは西田氏並びに増子氏の云はれたことをそのままに自身に返されてしまつた。即ち排他的な不平等なものに感心することは出来なかつた(佛所護念會——これは靈友會から分派した佛所護念會であつて前のは全然違ふものである——内藤氏談)このように久保が八年前なくなつて、これを受け續いで小谷が會長となつたが、創立當初から變な方向に向つていたものが、信者によつて批判されることとなつた。即ち理と行との不

一致である。現在今里町に講堂建築中の佛所護念會は信徒二十萬と稱しているが、教理は靈友會と同じであつて、法華經を重んずることだけしか知らず、何のために法華經を讀誦するのか、何故法華經でなければいけないかといふことは分つていない。組織の點も全く靈友會そのまゝである。こゝではたゞ合議制がとられている。

これに對して分派後猛烈な勢で勢力をもちつゝあるのは立正交正會(和田本町)である。これは近頃教義的に分派したのは吾會だけであるといつてゐるし、教義も日蓮宗から僧侶が入つて研究をなして居る。即ちその云はんとするところは日蓮上人の教學が唱題成佛論であるといわれているし、それが事實さうであるとされているのはあやまりであつて、唱題往生論が正しい、従つて唱題專修ではなく、規心門でなければいけないというのである。(立正交正會教學研究所鴨宮氏談)この理論が正しいかどうかは日蓮宗學者の批判にまかすが、これは鴨宮氏御自身の研究であるように見受けられるから、立正交成會としては、一應法華經による菩薩行の修行といふことになるであらう。しかしこの會は非常に新しい大きい立場をとつてゐることは事實である。

即ちそれは事業内容にうかがえることであるが、先づ第一に修養道場、これはこの系統獨特のものであらうが、他の分派の如く經典を讀誦するのでもなく、中幹部を中心に車座を作り、幾百、幾千のグループがお互に懺悔し合い、反省しあつていくという形式をとる。そして近代病的病院を開設、すでに相當数の患者を診察治療をなしている。そして理想として又現在研究中であるさうだが身體精神醫學を發達させようとしていることなどである。

この立正交正會に至つて表面的には慈悲行が行はれて西田氏の精神が流れているかの如く思はれるが、實質的にはさうとは考へられない節も多分にある。この系統は大體自らの立場に佛を引下して考へようとしている現世利益的なものであつて、菩薩行を實踐して成佛するという理想を信者各人がもつてゐるのではない。従つてその組織面に於ても現實が中心であつて、自己が中心である道義であつて、この流れは佛立講から起つてゐるものと思はれる。

これに對する對象的な在家佛教教團は孝道教團である。(横濱市東神奈川)

孝道教團の統理(この教團ではこう呼んでゐる)は天台僧侶(現在も天台に僧籍を有す)

新 興 宗 教

齋 藤 昭 俊

新興宗教と一概にのべられるものではないが、靈友會系統のものを概説して、新興宗教がどんな特長と、缺點をもっているかを見たい。

文部大臣官房宗務課編纂の「佛教系新興教團の種々相、その起源に關する諸問題」を見ると佛教系新興諸教團の系統別として日蓮主義諸派系新諸教團として靈友會教團系は、靈友會教團と思親會、博愛同志會教團、妙智會、法師會、佛所護念會、妙法教、德行會、靈友正義會、妙道會教團、靈友大慈會教團の十二種類に分別されている。これら多くの分派を親教團から生み出したのは文部省の調査では思親會は親教團との意見の相違から、立正交正會も同じで、妙智會を始め殆んど全部が親教團の紛擾とそれに基く意見の相違から分派したことになつてゐる。しからば親教團の靈友會というものはどういうものであつたらうかということからのべて見たい。

靈友會の創立者は久保角太郎という人で、生れは青森縣、上京してから宮内省笠原技師の下で工手として働いていた。ところが當時西田無學氏が佛所護念會という在家佛教の集りをもつてゐた。西田氏は子供の示唆によつて法華經、戒結二經（普賢經、無量義經）に

所依することになつた。特に二經を重んじて、それを自ら實踐していた。戒經に説くことは人格の陶冶であり、結經に説くことは慈悲の精神であり、懺悔の精神である。こういった法華經根本の菩薩行乃至は日蓮上人の心持をもつことが出來ず、悪い面のみをとつて、他人の人格を尊重することを忘れてしまつたのが既成日蓮宗である。こういう宗に對して所詮満足することが出來ず、その日蓮上人の本當の慈悲の精神をもつて、お互佛性をもつ人格を敬うと同時に、煩惱によつて佛性が蔽はれて、佛との交渉をたち排他的になることは智慧のないことによるのであつて、正見をうるためには釋尊の云うことに従つて反省し自覺して、それを佛の境地に到達するまで、佛の鏡に自己を照らし、懺悔し、努力精進してやまない。その第一になすべきことは報恩感謝ということである。こゝに佛所を立て、佛の慈悲を見出して、佛の段階を一つ一つ踏んでゆく。西田無學氏は實際に懺悔慈悲行を身を以つて實踐した。その教へと實踐とを西田氏亡き（大正七年九月三十日）後うけついたので増子正學氏である。この増子氏（現在吉祥寺在住）の處に久保角太郎が來訪し弟子入をしたのが大正九年であつた。ところが

久保はこの教を正しく解することができず病氣平癒の加持をやつたりして人を集め、北千住邊に靈友會を始めた。そこで増子氏はかようなことをなすのでは釋尊出世の意義も失はれるし、吾が教へを受ける資格なしとして大正十三年に破門を云いわたした。増子氏は久保がこのようになつたのは恐らく一月にもらつた家内が三月になくなつてしまつたことによるらしいといつて居られる。

それからが彼の一人舞臺となつて、教理の法華經、戒結二經を表看板として、佛所護念會で學んだ報恩感謝の念から釋尊を父母とする祖先崇拜が、單なる自らの祖先を自らが拜するという形にかはつて來て、そこには何らの教理的裏付けもなくなつてしまつた。

そして信者からは西田氏並びに増子氏の云はれたことをそのままに自身に返されてしまつた。即ち排他的な不平等なものに感心することは出来なかつた(佛所護念會——これは靈友會から分派した佛所護念會であつて前のは全然違ふものである——内藤氏談)このように久保が八年前なくなつて、これを受け續いで小谷が會長となつたが、創立當初から變な方向に向つていたものが、信者によつて批判されることとなつた。即ち理と行との不

一致である。現在今里町に講堂建築中の佛所護念會は信徒二十萬と稱しているが、教理は靈友會と同じであつて、法華經を重んずることだけしか知らず、何のために法華經を讀誦するのか、何故法華經でなければいけないかということとは分つていない。組織の點も全く靈友會そのまゝである。こゝではたゞ合議制がとられている。

これに對して分派後猛烈な勢で勢力をもちつゝあるのは立正交正會(和田本町)である。これは近頃教義的に分派したのは吾會だけであるといつてゐるし、教義も日蓮宗から僧侶が入つて研究をなして居る。即ちその云はんとするところは日蓮上人の教學が唱題成佛論であるといわれているし、それが事實さうであるとされているのはあやまりであつて、唱題往生論が正しい、従つて唱題專修ではなく、規心門でなければいけないというのである。

(立正交正會教學研究所鴨宮氏談)この理論が正しいかどうかは日蓮宗學者の批判にまかすが、これは鴨宮氏御自身の研究であるように見受けられるから、立正交成會としては、一應法華經による菩薩行の修行ということになるであらう。しかしこの會は非常に新しい大きい立場をとつてゐることは事實である。

即ちそれは事業内容にうかがえることであるが、先づ第一に修養道場、これはこの系統獨特のものであらうが、他の分派の如く經典を讀誦するのでもなく、中幹部を中心に車座を作り、幾百、幾千のグループがお互に懺悔し合い、反省しあつていくという形式をとる。そして近代的病院を開設、すでに相當數の患者を診察治療をなしている。そして理想として又現在研究中であるさうだが身體精神醫學を發達させようとしていることなどである。

この立正交正會に至つて表面的には慈悲行が行はれて西田氏の精神が流れているかの如く思はれるが、實質的にはさうとは考へられない節も多分にある。この系統は大體自らの立場に佛を引下して考へようとしている現世利益的なものであつて、菩薩行を實踐して成佛するという理想を信者各人がもつてゐるのではない。従つてその組織面に於ても現實が中心であつて、自己が中心である道義であつて、この流れは佛立講から起つてゐるものと思はれる。

これに對する對象的な在家佛教教團は孝道教團である。(横濱市東神奈川)

孝道教團の統理(この教團ではこう呼んでゐる)は天台僧侶(現在も天台に僧籍を有す)

の出であつて、その組織、運営を靈友會に學んでゐる。統理は約二年ほど靈友會に居つた。結局もつてで晩會、その後になつて晩會組及び所屬不明の行者などを統制してくれとの警察側の要請によつて孝道教團を組織したという。(岡野統理談) 彼が僧侶の出でありながら靈友會に入つたという動機は、お寺では食つていけないし、お寺は葬式屋だからということであつた。従つてこの教團では統理が毎日曜に講座を開き、教典及び法話をやつてゐる。それが多寶塔(現在建築中)という納骨堂をもつに至つては寺院佛教組織になつていくであろうが、從來の寺院佛教の弱點をついた新しい方法をもつてゐることは確かである。

以上二つの在家佛教(佛立講)からのと、既成佛教からの分角獨立の流れはともに強く理事圓融を稱へて、教理に即する實踐を強くうたつてゐるようである。

孝道教團では天臺の教理が理の法華經であり、日蓮の教義は事の法華經であつて、一方だきでは偏した完全なものとはならない。といつてゐるし、立正交正會では法華經にもとづく菩薩行の實踐を立てゝゐる。

これ位のことは佛教徒であれば誰れでも悉

知のことである。

しかしかように新興宗教が出て來たところの面は、既成佛教が知識としては充分は存知してはゐるものの、全然それを行じていないことにある。

吾々は先に世界佛教徒會議に於て、教へられたのもその點ではなかつたか。この點を新興佛教は強くこれを行ぜさせる。これらのことは理論にばかり走りたがる吾々を制禦してくれるのではないだろうか。

昔中國に空理空論を弄んだ派があつたが、當今の佛教はさういふ感がしないでもない。吾々が心すべきことは行の面にあるのである。

新興宗教が民衆に傳播し、受容されてゐる實態を考へるとき、吾々の努力精進の足りなさを痛感せざるを得ないのである。これだけに求められてゐる宗教をもつと眞面目に考へなければならぬと思ふのは吾々だけではなからう。

社會の根底と、文化の根底を流れてゐるのは宗教である。そしてその表れ方は種々に變つてくるのは當然であるし、又時代を象徵するものでなくてはならない筈である。従つて吾々は新興宗教の興廢に一喜一憂するもの

であつてはならない。正しいものは残つていくであらうし、正しくないものは滅亡していくであらうから、すべて困難と荒廢の中によきものは生れるのである。吾々はむしろ自身精進の怠りと釋尊出世の意義の喪失を恐れる。

よきものに學び、常に向上の心持をもつところこそ肝心なのであつて、新興宗教を理解もせず誹謗し排斥することはなすべきことではない。

正しく見、正しく聞き、正しく知ることの美しさを更めてこゝに云ふ必要もないであらう。(大正大學宗教學研究室)

五月號

春 曉
心 眼

吉田絃二郎
藤田寛海

戦犯と信仰特輯

死刑囚の死と入信の機

田中博夫

心經の刺繡と念珠

田端正雄

—スガモ拘置所訪問—

編輯部

病氣と念佛
訪 問

中村康隆
東山高等學校・常福寺

時評・現代短歌・芝園だより

讀者の声

○此の月になると急に暖かになり年寄りの私にはたのしいおまじりのこのごろです。毎月御誌到着をまち、すみからすみまで読みます。此の頃は一寸むづかしいのもありまして、若い者のひまなとき、説明してもらいます南無阿彌陀佛。

千葉縣柏町 矢野ふみ

○私が昭和二十二、三、四年頃名古屋鐵道教習所(豊川市)にゐました時、藤井實應さんに何かを教へて頂きました。又先生の御發案で佛教青年會なるものを組織し、私も入會しました。今回圖らずも貴誌を通じて先生の御消息が分り幸甚です。もし先生がお見えになりましたら、その時の不肖の子であると申上げて下さい。私ももうすぐ、家庭人になる心算です。佛の力に依りとかく住みにくいこの世を笑つて暮す様努力する覺悟です。

福井縣今庄村 小南善昭

芝園だより

○密雄先生、「これから大いに源平物を讀む」と云う。理由を聞くと「法然上人は清盛より十四才年下頼朝より十四才年上、上人入滅は實朝が將軍になつて十年目だから上人時代の世相を知るには是非必要だ」と。全くうっかりしていた七百五十年忌には、誰か上人傳のベストセラーを出さないかなあ。

○最近賢順先生、讀賣ホールの宗教講座(宗教懇談會)で「愛の世界」について、又、中山研究所では「法然の人間觀」を講演と、このところ大活躍。「宗祖を語るとなると、哲學や文化史を講ずるときとは違つた力が湧いてくる。何か大きな力に語らせてもらつていようだ」とは御本人の感想。

○所で、先生の願行寺にもやつと電話が通じたとか。大崎(49)九四九四で「よく供養供養」と讀むのだそう。全くスバラシイ。さて「欲・欲・欲」と逆に讀んだらどんなもの。人間の裏と表みたい

番號だ。

○大正大學の舊館も立派に改裝出來て見違える程。椎尾學長の壇上姿も一段と映える。老學長の努力の結實。立大、駒大と共に、宗教大このところ復興熱旺盛。

○三月號は印刷の都合で随分遅れました。四月號は大急ぎで追つかけました。(安居)

○六月號よりは更に一段と内容を充實の予定。ついでには會員各氏の注文、批評を振替用紙の通信欄を利用してどしどしお送り下さい。誌上許すかぎり讀者の聲を載せるつもりです。

○京都の高橋良和氏來訪、氏は全國に稀な兒童藝術研究所を主宰し不斷の活躍を續けておられるが、今年は、華頂短期大付属幼稚園を創められる由。

○増上寺も愈々瓦が載つた。

○吉水は毎月好評裡に連載。筆者は非常な抱負で「法然像」を一筆々々現はして來られた。此次を以て第一篇を終りますので暫く休み

ます。

○阿彌陀經の話は今回以て終りました。人生の問題と眞劍に取組んでこられた藤井先生の誠の光つたお話で、厚く御禮申上ます(龍海)

◆お断り

印刷所主人御病氣の爲、發行遅延し皆様に御迷惑かけて居ります。大いに努力し居ります故、暫らくお許しの程を。(編輯部)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(十共)。毎號定價三十圓千四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「浄土」 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿八年三月廿五日印刷
昭和廿八年四月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京都千代田區神田保町三ノ十
東京都港區芝公園五ノ一〇
電話 芝(四三)一三二八

最高傑作と絶讃！

武田泰淳著

風媒花

「群像」所載

生と死の問題を痛烈に抉る！

チャップリンの「殺人狂時代」よりも斬新な人間認識（平野謙氏）をもつこの傑作は、現代が要求した必然の作であつた。殺人の意識をもたずして殺しあう現代人の根源的不安を衝き容赦なく迫る問題作

読賣ベスト・スリー最高點獲得

（一九五二年度）

現代人を捉えた問題作！好評15版！

◀ 諸家、本書を激賞 ▶

神西 清氏（朝日紙）
けだし現代日本の
混亂の辛辣さはま
る戲畫として、こ
の作は戦後文壇の
最高收獲の一つ。
手塚富雄氏（毎日紙）
廣範な讀者層から
興味と好意をもつ
て迎えられてゐる
ことは、この作の
幅を示すもの。

伊藤 整・檀 一雄
神西 清・中村光夫
龜井勝一郎・堀田善衛
平野 謙・三島由紀夫
山本健吉・手塚富雄
白井吉見 ほか多数
日本圖書館協會選定圖書
NHK 推薦圖書
★B6判美本カバー付
★價二二〇圓下三三圓

東京小石川局區内 振替東京3930 講談社

團體宿泊御案内

團參者の御宿泊を十人以上百人位まで實費（二百圓より）で御引受けいたします。御照會下さい

東京都江東區深川三好町一の五

區役所前

長專院

電話深川（74）五八四八番

裝飾請負

増上寺・護國寺御用達

村山裝飾社

社長 村山 正治

營業所 東京都文京區江戸川町
電話小石川（85）一五四六